

令和7年度研究発表会のご案内



研究主題

共に学びにひたる子どもと教師

日 時 令和8年2月14日（土）8：50～15：50
 会 場 熊本大学教育学部附属小学校
 内 容 対面による各教科等の授業公開・分科会・講演

講 師

九州大学 教授 伊藤 崇達 先生



主な著書

「グループディスカッション－心理学から考える活性化の方法」金子書房
 「ピア・ラーニング－学びあいの心理学－」金子書房
 「自己調整学習の成立過程：学習方略と動機づけの役割」北大路書房

附属小学校ホームページのご紹介

新しいコンテンツ続々登場!!

● 実践・研究ブログ

校内で行われた最新の授業実践が掲載されます。

<https://www.educ.kumamoto-u.ac.jp/elem/> 熊大附属 小学校 検索

附属小学校SNS

本校の実践を SNS で発信しています。共に熊本の教育を充実・発展させてていきませんか？

熊大附小公式 Facebook

熊大附小 LINE 公式アカウント



附属小 研究だより

研究主題

共に学びにひたる子どもと教師



Contents

令和7年度前期の実践紹介
 研究発表会のご案内

校長挨拶



皆様には、日頃から本校の研究活動にご理解とご協力を賜り、心より感謝を申し上げます。

8月6日（水）に開催しました夏の実践研修会には、オンラインでのご参加を含め、全国各地から350人を超える先生方や学生の皆様にご参加いただき、盛会のうちに研修会を終えることができました。当日、ご指導を賜りました助言者の方々をはじめ、ご参加くださいました皆様に改めてお礼を申し上げます。

今回の研修会では、本校の職員のみならず、熊本県小学校国語教育研究会や熊本市算数教育研究会の先生方にも授業者として参加していただきました。本校の職員と公立学校の先生方が同じ土俵で共に授業づくりについて考える貴重な機会となったのではないかと思っています。また、本

校には、「公立学校の教育に協力する」という大きな使命がありますが、今回の研修会をきっかけとして、公立学校との連携が更に深まり、課題解決に向けて共に歩みを進めていければ幸いです。

さて、本校では、昨年度までの研究成果に加え、本年度から、「共に学びにひたる子どもと教師」というテーマの下、子ども相互の関係性が構築され、協力・連携の流れにのめり込む子どもと教師の姿を目指して、研究を進めてまいります。

来年2月14日の研究発表会では、このテーマを中心に据え、皆様との協議を通して、課題解決に向けた糸口を見つけられたら幸いです。多くの皆様のご参会を心よりお待ちしています。

校長 塩村 勝典

研究提言

「共に学びにひたる子どもと教師」

令和7年9月現在、次期学習指導要領の構想に関する議論が進められています。その議論は、学校の役割が、包摶的で他者への信頼に基づく民主的・公正な社会を支える基盤として重要であることを確認した上で展開されています。これから学校教育には、多様な他者と共に社会をつくるために欠かせない、人間関係を築く場としての役割が一層強く求められています。では、その具体的な姿とはどのようなものでしょうか。私は、自らの思いを主張しつつも折り合いをつけ、他者とよりよい関係を築いていくこと、そしてその挑戦を繰り返すことが保障される場に学校がなることだと考えます。すなわち、学校において「他者と共に在ること」を学ぶことが、これからますます重要になるのです。

そのような背景のもと、近年「納得解」を子どもたちが見いだすことの価値が注目されています。予測不能な社会を生き抜く力を育むには、既存の正解をなぞるだけでなく、子ども自身が仲間と共に新たな答えを創り出すことが欠かせません。とはいえ、答えが一つに定まらないことで、ひとりよがりな結論にとどまり、共に学ぶはずの教室で、かえって孤立を深めてしまうこともあります。だからこそ大切なのは、子どもが「結論として何を得たか」だけでなく、「その過程で誰と、どのように共に在ったか」に価値を見いだせるかどうかです。「先生があの子の振り返りを紹介してくれたとき、『私も!』って思えたんだ。」「友達の作品と比べてみたら、自分の考えの大変な部分がはっきりした。」こうした実感を子どもたちがもてる授業を、私たちはつくっていきたいと思います。今年度の研究主題「共に学びにひたる子どもと教師」には、子どもが他者と考えを重ねながら結論に近づいていく過程をたのしみ、その中で喜びや充実感を得られるような学びを大切にしたいという願いを込めていました。

右ページには、今年度の研究授業で見られた子どもたちの姿を紹介しています。そこには、クラス全体で学びを進める中で、仲間と共に何かを生み出したり、そのプロセス自体に没頭した

りする姿が数多く見られました。

保健・健康教育では、第5学年で「けが攻略シート作り」を中心とした学習に取り組みました。本校の5年生にとって一大行事である臨海学校。遠泳をはじめとする野外プログラムに向け、子どもたちは強い思いを抱いています。村上養護教諭はその実態を踏まえ、臨海学校のしおりに自分たちが作成した「けが攻略シート」を掲載することを単元のゴールに据えました。これにより、子どもたちは「みんなが安心して臨海学校に臨めるようになりたい」という共通の目的意識をもって取り組むことができました。また、同じけがを調べる子ども同士で協力する中で、一人一人の気付きが生かされ、互いの疑問を解決しながら、必要だと考える対処方法をまとめ上げていきました。

第6学年算数科「比」の学習では、班ごとに当たりとハズレの比を決めてたのしむ活動「くじ引きゲームをプロデュース」を取り組みました。津川教諭は、比の比較において、子どもたちがもつ「比同士を計算してもよい」という素朴な考えを取り上げ、それをきっかけに比の概念を深めさせたいと考えていました。班ごとにくじを作り、比較する状況を設定したところ、「混ぜたくじの比は、比同士を足せば出せる」という意見が出ました。子どもたちが「そうだ」と思い込んだその場で、異なる比を足し合わせたモデルを用いて検証すると、算出結果と実際の比が一致しないことに気付きました。こうして、全員で「なぜ?」を追究する学びが生まれました。

最後になりましたが、「共に学びにひたる」というテーマは、子どもだけでなく、教師自身にも向けています。授業の中で子どもたちと共に学び、同僚と研究を深め合う。その過程を共にたのしみながら取り組んでいきたいと思います。これを読んでくださっている皆さん、これからも本校の研究に関心を寄せていただき、共に学ぶ輪に加わっていただければうれしいです。

研究部長 上原 正士

実践紹介

第5学年 / 保健 / けがの防止

けが攻略シートを作つて 臨海学校に役立てよう

養護教諭 村上 朋美



【教材について】子どもたちがたのしみにしている臨海学校。けがなく安全に過ごせることが一番ですが、活動中に起こりそうなのが予測し、場面に合った適切な行動やけがの手当を考えることで、学習した内容を実践的に身に付けてほしいという願いをもち、本单元を構想しました。

【学びの様子】けがの種類に応じた適切な手当を「けが攻略シート」に記入し、実際に臨海学校で活用できそうか見直したところ、自信のなさそうな様子が見られました。例えば、海での打撲や捻挫の手当についてシートを作成していたチームでは、次のようなやりとりがありました。



けが攻略シートを見直している様子

第6学年 / 算数 / 比

くじ引きゲームをプロデュース!

算数科 津川 郷兵



【教材について】比が表す全体量と比較量を自ら調整する中で、割合についての理解を深めてほしいという願いをもち、本单元を構想しました。今回はくじ引きゲームを作る過程で、自分たちの班のくじの当たりとハズレの比やくじの全体量を繰り返し変化させ、割合の理解を深めていきました。

【学びの様子】自分たちの班のくじ引きゲームを作っていく中で、「もっと面白いくじ引きゲームにしたい」という思いをもち「2つの当たりとハズレの比が異なるくじ同士を足し合わせる」というアイデアが表されました。すると、2つのくじを足し合わせることで生まれた新しいくじの当たりとハズレの比は、「2つのくじの比同士をそのまま足し合わせるといい」という考えが出てきました。くじの比はどう



くじの中身の数を確かめる様子

しんや：海だから手当はできないのかな。

みさき：安静にするのも難しいよね。

はなこ：捻挫で大切なのは冷やすことでしょう。

水道ってあるのかな。

しんや：そもそもどこで手当できるかな。岩場？

そうた：岩場も暑くなりそうだよね。

実際の場面を想像させてることで、限られたものしかない海や砂浜では、自分たちが考えた手当ができないかもしれないという気付きが生まれました。その上でその気付きを全体の場で取り上げ、状況に応じて適切な手当をしていくためにはどのようなことが必要かを考えていく場を設定しました。そこでは「安全な場所への移動」の他にも「役割分担をする」「大人に知らせる」の3つの視点が出されました。子どもたちはそれらの視点を基に、考えた手当が実際に実行可能かどうか意見を交流したり、役割分担についてのイメージを膨らませるためにロールプレイをしたりしながら、シートの内容を充実させていきました。友達と試行錯誤しながら作成した「けが攻略シート」は、しおりに綴って臨海学校に持参し、臨海学校中にいつでも活用できるようにしました。

うなるのか、子どもたちは百分率を用いて説明したり、単元の中でこれまで使ってきた数学的表現で考えを整理したりする姿がありました。その姿を見取り、くじの中身の数の比を確認した子どもに、2つの比同士を足し合わせたときの比と、くじの中身の実際の比が違うことを全体で説明させることで、以下のようないい處が生まれました。

ゆうと：Aの比を丸として、Bの比を四角とすると、数字の大きさが違うから、足したらよくないんじゃないかな？

りくと：Aの比の4とBの比の1は価値が違うというか、1の値が変わっているから。

T：1の価値が違う？

りくと：1つあたりAが2個で、Bが5個だから。

りくとさんの言う、「1の価値が違う」とはなんなのか周りの友達とその解釈を伝え合う姿へと広がっていました。そして、比が表す1の中に含まれている個数について、くじの中身の数と対応させながらもう一度確認していました。このように、比が表す内包量と、そのくじの中身の個数である外延量の違いへとつなげることができました。